

⑫ 地域住民の里山づくり活動で、森の復興と地域コミュニティづくり

団体名：NPO法人ビオトープネットワーク京都(京都府京都市)

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

地域住民の里山づくり活動により、荒廃した森の復興を

- ・京都市山科区御陵大岩（みささぎおおいわ）の山科疎水北側にある山林は、かつては薪炭林・里山林として活用されていたと考えられるが、数十年間放置され荒廃していた。
- ・この森の再生を目指し、NPO法人ビオトープネットワーク京都は会員、地域住民などを対象として、平成23年7月より「みささぎの森」里山づくり活動をスタートし、自然観察等の講座の開催、里山づくり実践活動などを現在も継続して行っている。



▲地域住民が協力して遊歩道の整備

活動の内容

「みささぎの森」里山づくり(地域環境保全タイプ)

- ・「みささぎの森」里山づくりでは、毎月2回（第2、第4日曜日）の活動を基本に、平成25年度は延べ55回、214人が参加し、4月は果樹の植え付け、シカ柵設置、5・6月は通路・水路の整備、7月は不法投棄物の処理、9・10月は台風被害個所の整備、12・1月は落ち葉の堆肥作り、果樹を植えた箇所の整備、2月は伐倒木の処理を実施。平成26年度は休憩所を建設（購入）し、昨年度とほぼ同様の里山づくりを実施した。



▲台風被害により根こそぎ倒れた倒木

松林整備、シイタケの栽培(森林資源利用タイプ)

- ・平成25年度は1月～3月にかけて、ナラ、クヌギなどの間伐、処理、集積してホダ木を準備し、シイタケの菌打ちを実施した。

里山づくり講座、「わくわくフェスタ（秋・春）」を開催(森林空間利用タイプ)

- ・平成25年度は8月に東本願寺研修部の里山体験を行い、10月は山科醍醐こどものひろばの里山体験を実施した。11月は知己（ともち）地区住民との交流・親睦を目的とした森林体験学習である「秋のわくわくフェスタ」を開催し、地域住民や子どもたちとの親睦や交流に努めた。
- ・平成26年は4月に秋と同様の内容で「春のわくわくフェスタ」を開催した。



▲不法投棄物清掃で集められた廃棄物

活動の成果・効果

遊歩道の整備、作業小屋の建設が大きく前進

- 平成25年、26年度に「みささぎの森」里山づくり活動の一環として取り組んだ遊歩道の整備は、26年の秋に2年連続台風被害にあい後退したが、26年9月遂に尾根までの遊歩道第一ルートが完成した。また休憩所の建設（購入）も26年11月に完成し、里山づくりが大きく前進した。
- 台風被害からの復旧作業は非常に困難であったが、これを機会に活動参加者の結束が強くなった。

子ども関連の地域団体が定期的な里山利用へ

- 里山整備が進み、安心して自然体験ができるようになった「みささぎの森」を地域の子どもの育成に取り組むNPO団体「山科醍醐こどものひろば」が活動の場として定期的に利用するようになるなど、同ネットワークの活動に地域住民の理解と協力が一層得られた。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【里山林保全】	(H25) 214人 (H26) 110人	(H25) 55回 (H26) 11回	(H25) 1.9ha (H26) 1.9ha
【森林資源利用】	(H25) 126人 (H26) 実施中	(H25) 3回 (H26) 実施中	(H25) 0.5ha (H26) 0.5ha
【森林空間利用】	(H25) 126人 (H26) 189人	(H25) 3回 (H26) 3回	—

※H26年度は、9月末までの活動実績

工夫した点・苦労した点・今後の課題

森林体験学習の開催回数を増やし交流の輪を拡大

- 同ネットワークの里山づくり活動は毎月2回が基本だが、それ以外の日に地主が現地に居なくても活動ができるよう、部門ごとのグループを作り、活動実施日を増やして活動できるよう工夫している。建設した休憩所は整備活動等の集合場所の拠点として有効に活用されている。
- 同ネットワークの活動の理解者や協力者を増やすため、春と秋に「わくわくフェスタ」を開催し、本交付金の対象となる里山体験のほかに里山クラフト体験、竹や木を利用した遊具作りなどを実施し、地域住民との親睦・交流を図っている。また近隣で里山保全等を実施している団体のイベントに参加し、交流の輪を広げている。



▲山科醍醐こどもひろばとの交流

地域の若手人材の掘り起こし、助成金終了後の収入確保が課題

- 同ネットワークの個人会員は約70人で、土木作業などの高度な技術を持った人も少なくないが、高齢化が進んでおり、地域の若手人材を確保し、土木技術等の高度な技術の継承を進めていくことが課題。
- 本交付金や山科区役所、企業からの助成金が大きな収入源であり、交付金終了後の収入確保が今後の課題。

<総括> 成功を生んだポイント

交付金、助成金が森林体験学習開催や作業機器購入による作業効率の向上に寄与

- 本交付金や国、山科区役所や企業からの助成金が、さまざまなイベントの開催などの地域とのコミュニティづくりに役立ち、参加者が増加している。
- 本交付金により、高い技術を持った人たちに、わずかではあるが労働対価を支払うことができ、継続して活動の中心として参加してもらえている。
- 刈払機、チェーンソーなどの購入により、森林整備の作業効率が格段に向上した。



▲高い技術もつボランティアスタッフ

⑬ 里山の自然再生を通じ、持続可能な地域づくりを目指す

団体名 : NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会(大阪府八尾市)

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

ニッポンバラタナゴ保護のため、高安山の保水力の復元を

- ・大阪府八尾市高安山（たかやすやま）周辺の大小400のため池には、環境省指定「絶滅危惧IA種」である「ニッポンバラタナゴ」が生息している。NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会は、平成10年の設立時から、このニッポンバラタナゴを含む地域固有の生物多様性を維持することで、人と自然が共生して暮らせる持続可能な地域づくりを目指している。
- ・ニッポンバラタナゴが生息するため池の再生には、高安山の保水力を復元し、水循環系の健全化が重要となることから、交付金により、高安山周辺の放置された里山に手を入れ、土留め等の施行を行うなど、水源地の森林整備に取り組んでいる。



▲放置された里山

活動の内容

水源地の森林整備、下草刈り等による土留めと保水力の回復 (地域環境保全タイプ)

- ・高安山付近の郡川（こおりがわ）上流のクヌギやコナラなどの雑木林とヒノキ人工林エリアを中心に、毎月1回第1日曜日に下草刈りや間伐を行う。間伐した木材を活用して遊歩道を整備し、土砂の流出や斜面が崩壊しないように土留めを行い、森林の保水力向上を図っている。

間伐したコナラをフローリング等を利用（森林資源利用タイプ）

- ・ニッポンバラタナゴ保護のためには、産卵床となるドブガイの増殖が重要となる。
- ・ドブガイの増殖には、ため池の「ドビ流し」（池干し）実施後に腐葉土を含む山土の投入が有効とされる。そこで森林内の落ち葉を腐葉土として再生させ、ドブガイの増殖に活用している。
- ・間伐材としてコナラ等の雑木を切り出し、フローリング材やキノコ栽培のほだ木等への利用も行っている。

植生観察会や自然クラフト作り等のイベントを実施（森林空間利用タイプ）

- ・ガールスカウトや中高生等の参加による植生の観察会や、ツタのつるを利用した自然クラフト作り体験等のイベントを実施し、森林を活用した環境教育の場としても活用されている。



▲間伐と遊歩道づくりによる土留め



▲森林資源の利用

活動の成果・効果

ニッポンバラタナゴの個体数が大幅に回復

- ・生物多様性の維持には、森林の保水力向上が重要な要素と考えられるため、本交付金を活用し、間伐材を活用した土留めを行っている。
- ・保水力が向上した森林周辺の沢では、サワガニやカワニナ等の水棲生物が大幅に増加しており、森林の整備を通じ水量の安定化が図られた効果と考えられる。
- ・平成17年に数百尾だった保護池のニッポンバラタナゴが、平成25年度には約30,000尾に増殖したことが確認された。

新たな木材利用や遊歩道の整備・延長等を行い、活動の幅が拡大

- ・コナラを切り出し、従来の活動では行っていなかったフローリング材利用を実践した。
- ・遊歩道の整備により森林環境教育の実施が容易になり、教育の普及にも寄与している。

活動タイプ	延べ参加者数	活動回数	活動面積
【里山林保全】	(H25) 39人 (H26) 42人	(H25) 5回 (H26) 5回	(H25) 2ha (H26) 1.3ha
【森林資源利用】	(H25) 26人 (H26) 2人	(H25) 5回 (H26) 1回	(H25) 1ha (H26) 0.1ha
【森林空間利用】	(H25) 63人※1 (H26) 10人※1	(H25) 3回 (H26) 1回	—

※1 活動組織メンバーのみ

※2 H26年度は9月末までの活動実績

工夫した点・苦労した点・今後の課題

水循環系の健全化を目指し、森林整備及びため池の保全活動として「ドビ流し」を実施

- ・長年にわたり、自然遺産のニッポンバラタナゴを未来へ継承するための活動を行っており、高安山の水循環系の健全化のため保護池の「ドビ流し」（池干し）を実施している（交付金の活動とは別）。ドビ流しの後に、交付金を活用して作った腐葉土を保護池に投入した結果、ニッポンバラタナゴの産卵床となるドブ貝が増殖した。このドブ貝の増殖がニッポンバラタナゴの急増につながっている。
- ・また、水量の安定的な供給確保のため一体的に実施してきた森林整備も奏功し、生態系の多様性が実現された。

社会福祉推進の観点から、子どもたちの環境教育へも活用

- ・高安地域の子どもたちを対象に、高安山の森林整備体験を実施するなど、環境教育活動も実施している。
- ・水源地の森林にて整備した遊歩道も、環境教育の場として有効に活用されている。



▲「絶滅危惧ⅠA種」ニッポンバラタナゴ



▲ニッポンバラタナゴの個体数が回復

<総括> 成功を生んだポイント

森林整備と一体的に取り組んだニッポンバラタナゴの保全

- ・ニッポンバラタナゴの保全のためには、保護池の水源の森も含めた保全・整備が必要との考えから、間伐材を用いて水源地の森林にて土留め等の整備を行った。周辺の沢の水量も安定し、水棲生物の量も増加した。このように、森林整備と水棲生物の保護に一体的に取り組んだことが成功のポイントの一つと考えられる。

持続的に活動するための自主財源基盤づくりへの試み

- ・交付金の活用とは別に、ニッポンバラタナゴをモチーフとした関連商品販売の検討や、無農薬・有機栽培をモデル農地にて行い、試食会を行うなど、継続的な活動を行うための自主財源を産み出す基盤づくりにも取り組んでいる。



▲伝統的な資源循環システム「ドビ流し」

⑭ 里山景観の再生を通じ、環境保全やまちづくり推進を図る

団体名：NPO法人あいな里山茅葺同人(兵庫県神戸市)

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

里山の整備・保全を通じて、環境保全・まちづくり推進を図る

- 平成16年度に国営明石海峡公園で実施された、茅葺（かやぶき）屋根を守る講習会のメンバーを中心に組織された市民グループが発展し、平成20年にNPO法人あいな里山茅葺同人が設立された。
- 同会は、講習会を通じて培った知識・経験を里山の整備・保全に活用し、地域とネットワークを結び、エコロジー型の里山景観保全を通じた社会貢献を目的としている。現在は、甲南女子大学学習林を活動拠点に、里山の自然環境の改善、発生した資源の利活用や普及促進、里山保全に関する各種イベントの開催等に取り組んでいる。



▲幼稚園児の里山遊び体験

活動の内容

間伐、下草（ネザサ）刈り(地域環境保全タイプ)

- うっそうとした里山林を、間伐や下草刈りを行うとともに、発生した材を利用して歩道等の補修を行うことにより、良好な里山環境に改善した。
- 日当たり、風通しが良くなることによって甲南女子大学学習林ふれあいの森での子ども達の体験学習が安全で親しみやすいものとなっている。
- 同時に、兵庫県の絶滅危惧植物に指定されている植物の生育が確認されるようになるなど、生物多様性の状況の改善にも寄与している。



▲草刈機による下草刈り

キノコ栽培場整備及び地域交流イベントの開催(森林空間利用タイプ)

- 落葉樹林の空間利用として、谷間の陰地にキノコ栽培場を整備。
- 秋と春に、活動拠点の学習林を保有する甲南女子大と共催し、地域交流イベントとして、キノコ栽培親子教室を実施。キノコの植え付けおよび収穫を通じて、子ども達の身近な里山体験の場を提供している。
- 交付金の活動とは別に、ツリーハウスツアー、木の葉のファッションショー、ドングリ拾い工作教室等を開催、地域住民が自然と触れ合う機会・場を創出している。



▲地域交流イベント(キノコ栽培親子教室)

活動の成果・効果

地表植物の生物多様性の状況が改善

- ・森林の整備を通じて、兵庫県の絶滅危惧植物のCランクに指定されている昆虫の「ケラ」の生育が確認された。また、マムシグサの群生地及びコウヤボウキの個体数が増加するなど、生物多様性の状況が改善された。

子ども達がより安全に自然に親しめる場に

- ・林の手入れが行き届き、見通しが良くなったことで、子ども達を目視しやすくなり、体験学習を実施する場合等の安全性が向上した。
- ・地域交流イベントの開催により、近隣の子も達に身近な自然に触れ合い、遊びながら自然環境保全の大切さを感じてもらえることに役立っている。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【里山林保全】 森林整備	(H25) 116人 (H26) 219人	(H25) 45回 (H26) 56回	(H25) 1.5ha (H26) 2.5ha
【森林空間利用】 地域交流イベント の開催	(H25) 54人※1 (H26) 60人※1	(H25) 15回 (H26) 17回	—

※1 活動組織メンバーのみ

※2 H26年度は10月末までの活動実績

工夫した点・苦労した点・今後の課題

大学・地域住民との信頼関係構築のために

- ・隣接する住宅地域や市道部への落枝や枯損木等の悪影響を取り除いたり、持続的な林相整備による自然環境の保全等を通じ、大学や地域住民と良好な関係性を構築している。

高度な作業は専門業者に委託

- ・作業内容によっては、高度で体力を要する作業もあるため、一部作業を専門の業者に委託するなど、安全面に留意し、技術的に工夫しながら取り組んでいる。

循環型の森の整備に向けて

- ・今後、学習林の樹木の大径・高木化が進んでいくことから、そのような林相を念頭においた安全性と快適性を考えた森林整備を進める。
- ・生物多様性の保全と、地域の保護者と子どもたちが遊びながら身近な自然環境について話し合える場となる森づくりに、継続して取り組んでいく。これからも、大学生と連携を深め、落ち葉堆肥やキノコ栽培場などの充実を図り、森林の空間利用を展開していく。



▲森の恵み(キノコ栽培場)

<総括> 成功を生んだポイント

目標を立てることで、取組がより活発に

- ・以前は大学側との協議内容に応じて、比較的マイペースに行ってきたが、交付金事業による3年間の目標を立てることで、より主体的な活動が促されるなど、メンバーの意欲向上へと結びついている。

目的遂行のためには、参加者の自主性・認識の共有化を重視

- ・組織の活動運営は、参加者の自主性を尊重しながら、目的遂行に対して共通認識を持ち意見を出し合って、安全で具体的な方法を決定している。このように意思を統一してから、作業に取り組むようにしているため、これまで作業従事者のけが等の発生は無い。

楽しみながら取り組むことも、活動を持続させるためのポイント

- ・季節によって栽培したキノコの収穫などで森の恵みを味わうことや、間伐材の簡易製材や簡易施設の創造、遊びタイムを取り入れて気分転換することも、活動を持続させる上で重要な要素である。

⑮ 里山の恵みの中で、一人ひとりがいきいきと輝く「里山保育」

団体名 : いきいき成器保育園運営協議会(鳥取県鳥取市)

	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

地元団体で構成される運営協議会が保育園を運営

- ・いきいき成器（せいき）保育園運営協議会は、平成19年に地域の保育園の廃園が決まった際に、自治会長会や保護者会が保育園に代わる組織を運営するために、設立された。
- ・組織の運営を協議する中で、人口減少や、高齢化、過疎化などの課題に対応する、新たな保育園を開園することが決まった。この保育園の運営母体は、自治会長会や、まちづくり協議会、公民館等の代表により構成されることとなり、園児の募集や保育士の確保、施設の整備などが行われた。平成20年4月には、鳥取県では初の地域団体が自主運営する「いきいき成器保育園」が開園した。
- ・この保育園を運営する同協議会では、本交付金を活用することにより、成器地区ならではの豊かな森や里山を生かした森遊びや、収穫体験などのプログラムを子ども達に提供することで、自然や周囲の人を大切にすることを育てることを目指している。

活動の内容

里山での自然体験を生かした保育の提供（森林空間利用タイプ）

- ・同協議会が運営する保育園では、地域の先生やボランティア等と地域の里山へ出かけ、森遊びや昆虫採取、タケノコ採りなど里山の恵みの中で生きる力を育てている。
- ・交付金の活動とは別であるが、森林内で収穫したタケノコなど収穫した食材を給食などに使っている。園児が収穫した食材を自分たちで料理するなど食育にも力を入れている。また、少人数保育にこだわり、家族的な雰囲気の中で、園児の個性に合わせた保育の実践から、一人ひとりがたくましく、そして個性あふれる子どもに育っている。



▲園児によるタケノコ採り体験

自然とふれあう親子体験会の開催（森林空間利用タイプ）

- ・同会では、年に4回、園児だけでなく地域の子どもや保護者も参加する「森で遊ぼうこりす探検隊」や、毎月1回、「親子体験会」(交付金の活動とは別)などを実施し、自然と地域とが触れ合う里山保育を進めている。
- ・こうした活動を行う森林が地域住民の交流の拠点となり、地域の活性化に貢献している。



▲園児の森林探検の様子

活動の成果・効果

助け合う心、人を思いやる心が育まれた

- ・豊かな自然環境を生かした里山保育を実践することで、森林の役割への理解や自然との共生などの意識が園児に生まれ、保護者からは「この保育園に通わせて良かった」「自分で考え自分で決めるたくましさが育まれた」などの声が多く寄せられている。
- ・また、異なる年齢の園児と一緒に里山に入ること、「助け合う心」や「人を思いやる優しい心」が育まれている。
- ・多くの地域住民やボランティアの活動への参加が図られ、森林が地域の交流拠点としての役割を果たすようになった。

活動タイプ	延べ参加者数	活動回数	活動面積
【森林空間利用】 (こりす探検隊、てくてく隊、ツリー作り体験等)	(H25) 90人 (H26) 200人	(H25) 2回 (H26) 4回	0.25ha



▲地域住民との森遊び



▲地域住民と雪上トレッキングの様子

工夫した点・苦労した点・今後の課題

自然・地域住民とのふれあいやこだわりの給食による環境教育

- ・本交付金を活用している森林探検では、地域内の名所探索や里山の散歩などの園外活動にも力を入れており、美しい自然や地域住民とのふれあいを大切に活動に取り組んでいる。
- ・交付金の対象外ではあるが、園内の菜園で園児とともに育てた無農薬野菜や、地元特産の万葉美人米（有機米）などを使い、こだわりの給食を提供し、自然の恵みやふるさとの良さを園児が実感できるように工夫している。



▲地域住民との森林探検

効率的な保育園の運営と保育スタッフの人材育成が課題

- ・こうした特色ある里山保育を展開していくにあたり、当初は、園児の募集や、里山保育の魅力の発信方法に苦労した。
- ・地元住民の協力を得て森林体験活動等を実施しているが、運営に関わる地域の協力者（応援隊）の確保や、経費の節減策に苦労した。
- ・また、限られた予算の中で運営しているため、保育スタッフの効率的な運用や人材育成、応援隊の確保が大切な課題となっている。

<総括> 成功を生んだポイント

里山を生かした保育園が地域の交流の拠点を担う

- ・保育園の運営にあたり、地元団体で構成される運営協議会を中心として地域が一体となった子育てをする機運が醸成され、地域住民をはじめとする多くの人に支えられている。
- ・里山での環境教育やイベントの実施により、森林と保育園が地域住民の交流の場としての役割を果たすようになり、里山保育を軸とした地域の活性化が進められている。
- ・交付金の対象外ではあるが、運営協議会と地区公民館とが連携し、敬老会や運動会、文化祭、収穫祭など地域住民と園児が交流する場を提供している。高齢者をはじめとする地域住民の生きがいくくりにも貢献している。
- ・今後は、地元団体などによる支援の輪をさらに広げていくとともに、特色ある里山保育を地域内外に對して周知を図り、里山を生かしたまちづくりのモデルとなることを目指している。

⑯ 間伐材を生かした自然体験プログラムの推進

団体名：一般財団法人もみのき森林公園協会（広島県廿日市市）

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

森林公園内の管理・運営を目的として設立

- もみのき森林公園協会は、広島県と廿日市市からもみのき森林公園の管理・運営について委託を受け、公園内のオートキャンプ場周辺を中心に、雑草木の刈払いや、間伐等を進めるなど住民の憩いの場となるよう平成17年から森林整備を進めてきた。

高齢木やナラ枯れ病への対応が急務

- 公園内には400haの森林があり、その多くが広葉樹林である。また、50年を超える高齢木が数多くあるほか、ナラ枯れ病などの発生もあり、その対応が急務となっていた。これらの森林整備は公園の管理・運営業務とは別に、同協会が中心となって多くの地元ボランティアとともに実施してきた。
- 平成25年から本交付金を活用し、間伐材を利用した木炭や、ストーブ用の薪、椎茸のホダ木などの生産等を行っている。

活動の内容

地元ボランティアによる雑草木の刈払い（地域環境保全タイプ）

- 地元の森林組合等からの協力に加え、多くのボランティアにより、公園内の雑草木の刈払いを実施している。間伐した木材を森林内から運び出す作業など、多くが手作業により搬出している。
- なお、これらの活動は森林公園の管理・運営業務とは別に実施している。

自然体験、環境教育の推進（森林資源・空間利用タイプ）

- 間伐した木材については、薪ストーブやロケットストーブ等の燃料としての活用や、キャンプ場で薪、木炭の利用、椎茸のホダ木として利用している。
- 子どもを対象に、間伐材を利用したドアプレートなどのクラフト体験や、炭焼き、薪割り体験なども実施している。薪割りでは、自らノコギリを使い、木を切るところから体験することで、木のぬくもりや、木目等の木の構造について子どもたちが身近に感じるきっかけとなった。
- さらに、森林資源を利用するための施設として、炭焼き小屋の屋根の整備や薪小屋の建設、作業休憩所の施設整備も行うなど、自然環境教育の拠点としての活用も進めている。



▲クラフト体験教室



▲間伐材を使った焼板プレート体験

活動の成果・効果

植生の生育や、有害鳥獣被害の防止

- ・森林整備により、森林内が明るくなりササユリなどの植生が生育し始めたほか、有害鳥獣被害の防止も図られ、森林の再生につながった。

森林保全に対する意識の向上が図られた

- ・森林空間活動では、子どもを対象にした自然体験を実施したことで、里山における森からの恵みや森林保全に対する意識の向上を図ることができた。
- ・ストーブの薪やクラフト用材、木炭等の再生可能エネルギーの活用にもつながり、環境に優しい循環型の仕組みを作ることができた。また、来園者に対してもこうした森林保全活動の周知を図り、地域ぐるみの活動とする素地が作られた。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【里山林保全】 森林整備	(H25) 27人 (H26) 24人	(H25) 6回 (H26) 6回	(H25) 6.0ha (H26) 7.0ha
【森林資源利用】 (炭焼き体験、 椎茸原木伐採等)	(H25) 75人 (H26) 70人	(H25) 17回 (H26) 10回	(H25) 3.0ha (H26) 3.0ha
【森林空間利用】 (クラフト体験、ア スレチック大作戦 等)	(H25) — (H26) 250人	(H25) — (H26) 8回	—

工夫した点・苦労した点・今後の課題

豊かな森林資源を生かした体験プログラム

- ・同協会では、公園内にある木材や川など地域ならではの自然資源を活用した、さまざまな体験プログラムを企画・実施している。特に子どもを対象とした体験プログラムでは、普段体験できないような間伐材によるクラフト製作や炭焼きに加え、川遊びを通じた水中生物の観察、水資源教育（交付金の活動とは別）なども組み合わせ豊かな自然環境を生かしたプログラムを提供している。



▲間伐材を活用した木炭づくり体験

自然エネルギーの地産地消を目指す

- ・間伐材を利用したバイオマス燃料などの木質エネルギーをはじめとするエネルギーの地産地消を目指し、環境に優しいエコな森林公園を築いていく計画である。
- ・公園には、薪ストーブやロケットストーブなど木材を使ったエコな暖房設備が整えられている。今後は、間伐材を用いた薪や木炭等の燃料作りとともに、小水力発電や太陽光発電などさらなる自然エネルギーの活用にも取り組んでいきたい。



▲間伐作業の様子

<総括> 成功を生んだポイント

豊かな森林資源を活かした活動で地域住民の意識向上を図る

- ・同協会では、森林空間利用タイプで実施した体験プログラムの企画にあたり、公園内にある自然資源を最大限に活かした活動となるよう配慮した。創意工夫を凝らした体験プログラムにより、子どもたちを中心とした地域住民が多数参加し、森林保全への意識を十分に高めることができた。

地元ボランティアからの支援に支えられている

- ・雑草木の伐採などを実施する際には、地元ボランティアの協力を得て、森林整備を行っているが、活動当初はボランティアの確保に苦労した。
- ・体験プログラムやボランティアの参加者の募集は限られた予算の中で実施しているが、募集にあたり、ホームページ、新聞チラシや広報誌への募集案内の掲載など広報に注力し、多くの地元ボランティアの協力が得られ、活動が支えられている。

⑰ 学校林を活用した林業教育の推進

団体名：板野郡森林組合(徳島県阿波市)

	地域環境保全タイプ (里山林保全)
	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

阿波高校が行う環境学習を支援

- 板野郡森林組合は、徳島県立阿波高校が毎年行っている植林や下草刈りなどの学校林保全活動を平成15年から支援している。具体的には、同組合は生徒が安全に学校林まで行くための学校林まで通じる3km程の山道の整備のほか、学校林内を生かした林業教育の支援を行っており、この活動に本交付金を活用している。
- 阿波高校の学校林は、阿讃山系の南山麓にあり、広さは約7万㎡。現在は樹齢数十年の広葉樹やヒノキが生育している。この活動が始まる前は手入れが行き届かず、森林内の景観が損なわれるなど、森林整備が課題となっていた。
- そこで、同組合と阿波高校の同窓会である松契会(しょうけいかい)、阿波高校教職員、保護者などが一体となり、生徒の間伐作業や植樹体験等を取り入れた環境学習の実施により、生徒の地元里山への関心や林業に対する理解を深めている。

活動の内容

環境学習の実施計画を支援(森林空間利用タイプ)

- 同組合と阿波高校は、学校林保全のための環境学習を通して生徒が自然環境や林業の一端を学び、母校愛の醸成を図ることを目的に、1日かけて間伐や下草刈り、植樹等の整備体験を行っている。
- 環境学習の当日は、カエデやヒノキの植樹、間伐体験等が安全に行えるよう、事前の作業箇所や当日のスケジュールなど同組合と教職員とで入念な打ち合わせを行っている。

生徒が楽しめる森林を生かした環境学習を企画(森林空間利用タイプ)

- 環境学習として、のこぎりやチェーンソーによる間伐や植樹体験に加え、生徒が楽しめる丸太切り大会も実施している。
- 丸太切り大会は、毎年恒例となっており、使用する丸太を選定してクラス対抗とするなど楽しく、そして良い思い出になるよう工夫している。



▲植樹後の森林風景



▲クラス対抗の丸太切り大会

活動の成果・効果

里山への関心や林業に対する理解が深まった

- ・林業保全体験を通じて、阿波高校の生徒の地元里山への関心が高まったほか、林業の必要性に対する理解が深まった。

生徒間のコミュニケーションが向上

- ・生徒は自然豊かな環境のもとで、さまざまな林業体験を行うことで心身ともにリフレッシュでき、日ごろの学校生活では味わうことのできない貴重な経験ができています。
- ・間伐や植樹、クラス対抗の丸太切り大会等を通じて、生徒間のコミュニケーションの向上や、良い思い出づくり、母校への愛着等へつながっている。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【森林空間利用】	(H25) 240人	(H25) 1回	(H25) —
	(H26) 250人	(H26) 1回	(H26) —



▲整備後の植林の様子

工夫した点・苦労した点・今後の課題

林業を身近に感じることができるよう工夫

- ・体験型の環境学習に力を入れている阿波高校に対し、地元の団体として賛同、協力したいとの思いから、同組合は学校林の保全活動を開始した。
- ・普段は林業になじみのない生徒が、間伐や植樹などを実際に体験することで、林業や森林の機能に対する理解が大きく深まっている。持ち帰った木材を使って、ベンチや木工品を制作するなど、林業をより身近に感じてもらうため、カリキュラムを工夫している。



安全作業の徹底と、さまざまな体験プログラムの企画が課題

- ・学校林保全のための体験学習には200名を超える生徒が参加するため、のこぎりやチェーンソーの使用法の指導、安全作業方法などを徹底し、安全確保に細心の注意を払っている。
- ・毎年、行っている体験学習の内容がほぼ同じなので、作業内容等の検討が必要となっている。
- ・生徒や阿波高校教職員などからの要望を踏まえ、次年度以降は間伐材を生かしたさまざまな体験プログラムの企画が課題となっている。



▲学校林での体験プログラムの様子

＜総括＞成功を生んだポイント

地域が一体となった取り組み

- ・同組合と阿波高校が毎年行っている環境学習は、阿波高校の同窓会である松契会、阿波高校教職員、保護者などが一体となって実施していることが成功の要因といえる。

地域全体が支え合う機運が醸成されている

- ・限られた予算や人員の中で、お互いが負担し合い生徒の教育の一助になればとの思いで、活動が続いており、地域全体で支えていこうとする機運が醸成されている。
- ・学校林保全のための環境学習を学校カリキュラムに取り入れているのは、県内では阿波高校が唯一であり、特色ある取り組みといえる。

⑱ 伐採竹に付加価値を付け再利用に取り組む

団体名：里山を良くする会(愛媛県今治市)

	地域環境保全タイプ (里山林保全)
○	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
	森林資源利用タイプ
	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

荒廃の進んだ里山を再生

- ・今治市では以前から地域住民が主体となり、森林を貴重な水源である「緑のダム」として維持管理を行ってきた。しかし、近年は孟宗竹をはじめとする放置竹の増加や侵入竹による山林の荒廃が課題となっていた。そのため今治地区の住民が「里山を良くする会」を設立し、平成25年から豊かな里山となるように竹林整備に取り組むようになった。
- ・地域協議会である「公益財団法人 愛媛の森林基金」は、竹林所有者から荒れた里山を何とかしたいと相談を受けた。そこで地域協議会は、竹林整備に実績のある里山を良くする会を紹介し、交付金を活用した竹林整備が始まった。



▲整備前の荒れた竹林の様子

活動の内容

竹をチップパーで粉砕し、竹チップは堆肥化して再利用（地域環境保全タイプ、侵入竹・竹林整備）

- ・竹林0.9haを整備。まず下草刈りを行い足場を確保し、チェーンソーにより竹林を伐採。整備が進むにつれて、竹林に日光が入るようになり明るく美しい里山となった。
- ・伐採した竹を集め、斜面に生える竹の根元に横積みし棚を作成。急斜面に生殖する竹は大雨により崩れやすいため、山崩れ防止機能を果たしている。
- ・伐採後は、ロープを使い斜面から運び出すことで体の負担を軽減。粉砕機（チップパー）の近くまではバックホウで運搬し集積していく。
- ・集積した竹をチップパーにより粉砕。運搬しやすいよう袋詰めを同時に行い、竹10本程度で1袋分となり、1日で最大10袋粉砕している。
- ・袋に詰めた竹チップを堆肥場まで運搬。竹チップを半年から1年程度自然発酵させて堆肥化している。
- ・竹林整備の作業道や里山道に竹チップを敷き詰め、悪路の改善を図っている。竹チップの敷き詰めた場所は雑草が生えにくく見た目もきれいに保たれている。



▲伐採した竹で棚を作る



▲チップパーにより竹を粉砕

活動の成果・効果

明るい里山が保たれている

- ・平成25年度から3年計画で竹林を整備。森林整備と併せて、竹チップを里山道に敷き詰めるなど整備を行い、地域の人が里山に入りやすくなった。
- ・日の光が入る明るい竹林となり、竹林所有者や地域の人たちに喜ばれている。
- ・チップパーで竹をチップ化し、それを法面や作業道等に敷き詰め、道の保護、雑草の抑制に役立っている。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【侵入竹・竹林整備】	(H25) 53人 (H26) 実施中	(H25) 22回 (H26) 実施中	(H25) 0.9ha (H26) 5.7ha



▲竹チップを里山道に敷き詰め悪路を整備



▲袋づめされた竹チップ

工夫した点・苦労した点・今後の課題

竹で作った堆肥を農業にも活用

- ・チップにした竹を堆肥化し土壌改良に利用している。
- ・竹で作った堆肥を田んぼに入れる事でおいしい米ができる。また、堆肥を畑に抄き込むことで、肥よくな土地となり野菜づくりにも使われている。

伐採した竹の利用方法についてさらに検討を進める

- ・竹林整備は法面保護や作業の利便性から、伐採した竹は山から搬出せず、棚を作り積んでいる。しかし、時間経過とともに作業の妨げになること、景観を損ねるといった課題がある。
- ・伐採した竹の搬出後の利用方法を考える必要がある。竹の持つ抗菌作用を生かした使い方や食材としての利用など検討していく。
- ・竹を堆肥化しても利用者の確保が難しい。竹堆肥の良さをもっとPRしていくことが必要。
- ・竹を搬出する場合、場所によっては労力がかかり過ぎ、コスト面で課題が残る、現場での利用法も検討が必要。
- ・竹のチップについて、良さをどのように広めていくかPR方法が課題。



▲竹チップは運搬しやすいように袋詰



▲チップパーまでは重機で作業

<総括> 成功を生んだポイント

竹チップや堆肥を農業に生かし地域に還元

- ・地域協議会が、森林所有者と活動組織を結びつけたことが成功の要因となった。
- ・伐採した竹をどう活用するかが課題となるが、里山を良くする会では、チップにし堆肥化することで成功している。地域の農家に販売するなど有効に利用できている。
- ・伐採した竹をすべて棚に積むことは難しく、搬出しなければならないが、作業現場でチップパー機械を使い粉碎しているため、効率良く運び出す事ができている。
- ・堆肥化した竹を畑に敷き詰めることにより、農業用マルチ材を使ったときと同じ効果が出せている。また、使用後も畑に抄き込むことができ、ゴミが一切発生しないといった利点もあり、環境に優しい材として期待できる。
- ・自然発酵により竹チップを堆肥化しているため、堆肥の中にはカブトムシの幼虫が多く含まれている。この幼虫を地域の幼稚園などに寄付しており園児に喜ばれている。園児が里山への関心、興味を持ってもらうきっかけとなっている。

⑱ 地域・ボランティア・企業・行政が一体となった協働の森づくり

団体名：こうち森林救援隊(高知県高知市)

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
○	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

地域住民の水源地である里山を守る

- ・高知市行川（なめがわ）地区（約30世帯）と公立行川小中学校（全校児童数約50人）の水源地となっているスギ・ヒノキの人工林地帯は、植樹されて40年余手入れされていなかった。林内は、風倒木や枯損木が蔓延し、水源涵養機能の低下、山腹崩落などの災害の危険性も懸念されていた。
- ・雨が降れば大洪水の危険性が高まり、渇水の時期は深刻な水不足となり悩まされていた。
- ・これらの課題を解決するため、地元（行川地区）の簡易水道管理組合長から依頼を受け、平成25年9月から、こうち森林救援隊が交付金を活用した森林の整備を始めた。
- ・同救援隊の発足は平成17年。隊員は現在、約130人で10～80歳までの老若男女がボランティアで森林保全活動に取り組んでいる。CSR活動として森林保全に取り組む企業との協力も進み、活動の範囲を大きく広げている。

活動の内容

保水力の高い健全な森づくりに取り組む（地域環境保全タイプ）

- ・スギ、ヒノキの人工林では、下草の刈払いや侵入竹の除伐、風倒木や枯損木などの支障木を除伐するなど適切な間伐を実施した。
- ・侵入竹に覆われたスギやヒノキの人工林では、まず竹の除伐を実施した。
- ・除伐したスギやヒノキの枝葉、竹などをチップパーにより粉碎処理を行った。
- ・伐採木を土留め用として横積みし、斜面の崩落防止、保水力を高めている。



▲整備した里山に植樹

ボランティア祭りで、丹精込めて作り上げてきた木工製品を販売（森林資源利用タイプ）

- ・伐採した原木を搬出して、薪やシイタケの原木として活用しているほか、箸やスプーンなどの木工製品の原木として利用している。
- ・整備後は落葉樹、桜の木を植樹。地域の人々が訪れ、空間利用できるよう計画している。
- ・年に一度、「こうち森林ボランティア祭り」を開催。製作した木工製品を販売している。また、ボランティア祭りでは植樹や、地元農産物の販売などを行い、地域の人たちとふれあい、つながりを深めている（交付金の活動とは別）。



▲隊員が製作した木工製品を販売

活動の成果・効果

健全な里山がよみがえる

- ・里山林整備により、スギ・ヒノキ、侵入竹などの伐採後は落葉広葉樹を植樹。結果、針葉樹・広葉樹の混交林化が進み、水源の森として保水力が向上した。

ボランティア活動に取り組む人たちへの感謝祭を開催

- ・伐採したスギ・ヒノキなどを使い、箸やスプーン、コマ、竹細工などを製作。「こうち森林ボランティア祭り」などで販売し、里山に親しみを感じてもらった。イベントには150人が参加し盛況となった。交付金の活動とは別であるが、このような活動の収益が、救援隊の活動資金となっている。

	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【里山林保全】 森林整備	(H25) 84人 (H26) 96人	(H25) 12回 (H26) 10回	(H25) 3.0ha (H26) 3.0ha
【侵入竹・竹林整備】	(H25) 40人 (H26) 40人	(H25) 5回 (H26) 5回	(H25) 0.8ha (H26) 0.7ha
【森林資源利用】	(H26) 24人	(H26) 3回	(H26) 0.8ha

工夫した点・苦労した点・今後の課題

参加者ができることを楽しみながら活動

- ・森林整備活動では、参加者一人ひとりが楽しみながら自分のできることを行うことを基本としており、作業の強要は行っていない。その結果、継続的に参加する人が増えている。
- ・森林整備後は、親睦会を開き交流を深めている。参加者同士のつながりが強まり、活動の輪が広がるよう努めている。
- ・安全管理を第一に考えており、ヒヤリハット体験は情報を共有。再発防止に努めている。



▲女性の参加者も多い

活動地域を広めていくため、核となる人を育てることが課題

- ・ボランティア参加者が増加するなかで円滑な活動を行うため、事務局業務を実施できる人材を確保していくことが課題となっている。
- ・今後は、他地域でも活動の核となる人材を育成し、活動を広めていくことを計画している。各地域の活動に対し、こうち森林救援隊が支援していく方式で、県内外への普及を図る。



▲間伐の研修会で人材育成

<総括> 成功を生んだポイント

次世代につながる交流の輪を広めながら、森づくりに取り組む

- ・こうち森林救援隊では、ボランティアや地域住民、企業、行政が一体となった「協働の森づくり」を行っている。森林整備といった活動を通して、多くの人々が出会い、交流し、つながりを広めていくことで地域の活性化につなげている。
- ・自然の中で仲間と楽しみながら、地域の森林を守っていくことがやりがいにつながり、継続的な活動を実現している。
- ・自ら山林を所有する人が救援隊の活動に参加することでノウハウを習得し、新たに自伐林家として森林経営を試みるケースも増加している。
- ・この活動を広く知ってもらい次の世代に伝えていくため、情報発信に積極的に取り組んでおり、活動内容はブログなどで閲覧できるようにしている。
- ・当団体では、参加者の垣根を出来るだけなくし、子どもから高齢者まで誰でも参加できるような雰囲気づくりを大切にしている。

②0 人々が集う里山で森林環境教育や里山文化の継承に取り組む

団体名：100年の森を育てる会(福岡県筑紫野市)

○	地域環境保全タイプ (里山林保全)
○	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

美しい里山を復活させる取り組み

- ・筑紫野市隈(くま)地区周辺には、かつて田畑や森林が広がり豊かな景観があった。しかし、近年は森林所有者の高齢化や後継者不足から里山が整備されなくなっていた。残った神社の森やその周辺には竹林(孟宗竹・真竹)が広がり、大雨が降ると集落に雨水が流れ込むなど田畑や住宅地への悪影響が懸念される深刻な状況になっていた。
- ・地区住民の働き手の減少や高齢化が進み、昔ながらの美しい里山の保全が困難になってきたため、地区住民7人と自然保持の活動ができる森林インストラクター8人が里山保全の協定を結び、荒廃した神社の森と、周辺に広がる雑木林や竹林の整備を行うようになった。この活動をきっかけに平成25年に100年の森を育てる会を結成し、本交付金による森林整備活動を開始した。

活動の内容

地域住民と共に里山整備(地域環境保全、里山林保全・竹林整備)

- ・現在、100年の森を育てる会の会員は21人。隈地区にある日吉神社の周辺に広がる雑木林の草刈り、森林内外の竹の伐採と整備を行っている。
- ・作業道、遊歩道の整備を目指して、会員や地区住民とともに準備を進めている。



▲自然観察会の様子

キノコの原木として利用し、体験学習を実施(森林資源利用)

- ・除間伐した材は、シイタケなどキノコの原木として利用。キノコ栽培の体験学習を実施している。また、薪にしたりクラフト材として利用している。
- ・伐採した竹は搬出後、会員や近隣の人たちが農業資材(棚材、野菜などの支柱)、森林空間利用のクラフト材などに利用している。



▲キノコの栽培について説明

自然とふれあえる森の体験活動を開催(森林空間利用)

- ・森の体験活動は、地域内外の人たちに広く参加を呼びかけている。自然環境教育の一環として、自然観察や生き物観察などを実施し、地区の子供会をはじめ、近隣の幼稚園、小中学校の子どもとその家族も一緒に参加している。

活動の成果・効果

森林環境教育が広がっている

- ・森林の草刈り、侵入竹の伐採により、子どもたちや、地域の人たちも里山に入るようになった。
- ・地域の協力者によって山小屋が造られた（交付金の活動とは別）。この山小屋を活動の拠点としながら本交付金を活用することで、森林環境教育の学習の場、会員と地域の交流の場としての利用が広がっている。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【里山林保全】	(H25) 15人 (H26) 10人	(H25) 3回 (H26) 7回	(H25) 0.3ha (H26) 0.3ha
【侵入竹・竹林整備】	(H25) 40人 (H26) 44人	(H25) 8回 (H26) 13回	(H25) 0.3ha (H26) 0.5ha
【森林資源利用】	(H25) 9人 (H26) 16人	(H25) 3回 (H26) 4回	(H25) 0.3ha (H26) 0.3ha
【森林空間利用】	(H25) 30人 (H26) 175人	(H25) 2回 (H26) 8回	—

工夫した点・苦労した点・今後の課題

地域の人に親しまれる森林環境教育活動

- ・会員に森林インストラクターの有資格者が多数おり、それぞれの知識と経験を生かし、地域の人を楽しめる体験活動を開催している。
- ・里山でのタケノコ採りや竹製のけん玉、花器作りなど親子で参加し楽しめる企画が多く、地域の人に親しみのある里山となっている。
- ・どんぐりを使ったコマ作りなど参加費は無料で、集落の子どもたちや親も参加している。参加者はリピーターが多く、活動する会員と子どもたちも親しくなっている。
- ・毎月実施している森林空間を利用したイベントの参加者集めに苦労した時もある。地域にイベントチラシを届けても効果がなかった。そこで、参加した子どもの家庭に次回の案内チラシと子どもの活動写真や集合写真を添えて郵送した。その結果、家族や兄弟の理解が得られ、口コミで参加者が増えていった。



▲伐採した竹を運び出す子どもたち

活動の継続に、リーダーの育成が課題

- ・活動を継続するうえで、森林インストラクターの有資格者を更に増やすこと等、リーダーの育成が課題。
- ・月に一度、子どもたちを対象に、森林生態学習や生き物観察、ネイチャーゲームを実施しているが、近くにトイレがなく、民家のものを借りている。常設トイレの設置を検討したい。

<総括> 成功を生んだポイント

地域の人たちが憩える場として整備

- ・自然環境を利用して、子どもたちが楽しめるレクリエーションや環境整備を行っている。伐採した竹材を使った工作やタケノコ掘りなどを企画し、地域の子供たちが楽しめ、遊べる場となっている。
- ・子どもを通して、親も里山に足を運ぶようになり、親同士の交流の場にもなっており地域のつながりを深めている。
- ・活動拠点を「100年の森」と呼んでいるが、身近にある里山として、地域の人や子たちが自由に訪れて散策したり遊んだりできる、憩える明るい森林づくりに努めている。
- ・里山整備をしている会員の一部が森林インストラクターであるため、ネイチャーゲームにおいても環境教育の要素を盛り込むことにより、森林の機能等を地域の人たちに伝え、里山を身近に感じてもらっている。
- ・整備を行った里山は荒廃が進んでいたが、学習の場、遊びの場、交流の場として地域住民に利用されるようになり、本来の機能や美しい姿を取り戻しつつある。

②① 持続可能な竹林整備と人が集まる場所の創造を目指して

団体名：環境保全教育研究所(長崎県長崎市)

	地域環境保全タイプ (里山林保全)
○	地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備)
○	森林資源利用タイプ
○	森林空間利用タイプ



活動に取り組んだ経緯

地域が一体となった竹林整備事業

- ・環境保全教育研究所は、子どもたちの自然に接する機会の減少や、地域環境に関する社会問題の解決のきっかけ提供や学ぶ場をつくるために平成22年に設立された。
- ・長崎市田手原町(たでわらまち)には、竹林や広がっているほか、竹細工職人の存在やタケノコを収穫してきた歴史がある。しかし、近年の竹林所有者の高齢化に加え、放置竹林の増加もあり、動植物への影響や枯れ竹の除去が問題となっていた。
- ・こうした地域の問題を解決するため、同研究所が中心となり、長崎市社会福祉協議会や地域の自治会・学童保育など多様な団体と連携し、本交付金を活用した竹林整備事業が進められている。

活動の内容

地域住民の要望に沿った竹林整備(地域環境保全タイプ)

- ・竹林の保全を目的とした活動では、竹林を整備する前に現地調査を行い、所有者がどのような竹林へ再生したいのか要望を汲み取った上で、整備している。
- ・具体的な整備手順としては、枯れ竹の除去、年数の古い竹から間引きし、竹林へ限なく日光が届くように整備を進めている。

研究が進む伐採した竹の活用方法(森林資源利用タイプ)

- ・同研究所では、伐採した竹を活用した竹炭づくりに加え、竹チップによる土壌改善、竹炭利用の消臭剤など竹の資源利用を進めている。
- ・また、伐採した竹を活用し、炭焼き、竹細工、竹灯籠、竹チップを混ぜた堆肥などさまざまな活用方法を模索し、用途も広げている。

竹林整備の体験イベントを夏休みに開催(森林空間利用タイプ)

- ・竹林整備を体験できるイベントを夏に開催しており、夏休み中の子どもたちが多数参加する森林環境教育の場となっている。



▲地域の子どもたちとの竹林伐採



▲伐採した竹を生かした炭焼き

活動の成果・効果

竹林の保全と動植物の再生につながった

- これまで放置されていた竹林が整備され景観が美しくなったほか、日光が入るようになり動植物が育つようになった。また、地域住民も地元の竹林に対する関心が高まった。

世代間交流や地域コミュニティの形成に寄与

- 竹林整備を体験できるイベントの準備にあたり、竹の切り出しや、節取りなど地域の自治会や子ども、高齢者などが、ともに準備から行うことで、子どもたちの竹林整備をはじめとする自然環境教育のほか、地域における世代間交流や、地域コミュニティ形成にも寄与している。

活動タイプ	延べ参加人数	活動回数	活動面積
【侵入竹・竹林整備】	(H25) 34人 (H26.10) 69人	(H25) 13回 (H26.10) 20回	(H25) 0.5ha (H26) 4.3ha
【森林資源利用】 (竹炭焼き)	(H25) 8人 (H26.10) 4人	(H25) 2回 (H26.10) 1回	(H25) 0.5ha (H26) 0.5ha
【森林空間利用】 (竹林整備体験)	(H25) 51人 (H26.10) 54人	(H25) 2回 (H26.10) 3回	—

工夫した点・苦労した点・今後の課題

非日常的な体験を企画

- 地域の子どもたちに竹林に関心を持ってもらうため、楽しく体験できる体験を企画するよう試行錯誤している。竹細工教室など、日常生活では体験できないプログラムを心がけている。
- 伐採した竹を竹炭にして、細かいパウダー状に加工した「竹パウダー」を作った。竹炭のパウダーは嫌気性で乳酸菌発酵が促され、土壌改良に効果があるため、無農薬での野菜づくりや竹林の土壌流出を防ぐのに役立っている。



▲消臭効果のある竹炭商品

さまざまな世代や多様な団体との緊密な連携が課題

- 竹林整備や体験教室の開催にあたり、さまざまな世代の人や多様な団体と連携しながら事業を進めているため、目的意識の共有や、日程調整など苦労した。
- この活動を地域に浸透させ、多くの子どもたちに参加してもらうため、行政や社会福祉協議会と連携した父母への呼びかけなど地道な周知を行うことで活動の輪を広げた。

<総括> 成功を生んだポイント

多種多様な人が集まる「交流の場」となっている

- 竹林整備をきっかけに、普段関わることが少ない子どもから高齢者、学生など多種多様な人が自然と集まる「交流の場」となっている。
- 地域の子どもたちにとって、竹細工教室や竹の伐採など「体験学習の場」の役割も担っている。

地域から愛される活動を目指して

- また、この活動を「へんちくりん」と名づけ、親しみやすさ、地域住民や市内外からも気軽に参加しやすい活動として発信していること、そして地域から愛されていることが成功している要因といえる。このユニークなネーミングには、竹林とさまざまな世代の人たちが出逢って、変わっていくという願いが込められている。



▲伐採した竹の搬出風景

